

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12413

研究課題名（和文）北スマトラ州における日系インドネシア人のエスニシティの世代別変遷

研究課題名（英文）Generational Changes in Japanese Indonesians Ethnicity in North Sumatra

研究代表者

伊藤 雅俊（ITO, Masatoshi）

日本大学・国際関係学部・助教

研究者番号：20791073

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）： 残留日本兵を先祖とする日系インドネシア人とはどのような人々であることを明らかにするために、多角的な側面から日系インドネシア人のエスニシティ（日系人意識やエスニック・アイデンティティとも言い表せるもの）の解明を試みた。

主要なフィールドを北スマトラ州メダンとして民族誌的研究を行い、今日でも日系人が自らを日系人であると同定する理由や日系人として大切にしている考えや記憶を明かにした。また、彼ら彼女らがいかにして日系人意識を持つに至ったのか、さらにはその日系人意識がどのように強化されてきたのかを探ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インドネシアで日系インドネシア人がもっとも多く集住する地域である北スマトラ州メダンにおける日系人、中でもとくに日系二世のエスニシティを彼ら彼女らの語りを基に明示できたことが学術的意義であると言える。

社会的意義としては、北スマトラ州のメダン州立大学と北スマトラ大学において特別講義を行い、両大学がそれぞれ主催した国際セミナーで研究発表を計2回実施したことなどが挙げられる。講義および研究発表の内容はエスニシティ関連のものであったが、彼ら彼女らの存在を認知しているインドネシア人一般（非日系インドネシア人）はそこまで多くはないため、まずはその存在を知ってもらえたことに意義があると思う。

研究成果の概要（英文）： I examined the nature of Japanese Indonesians in North Sumatra descended from Japanese soldiers from various perspectives through the lens of ethnicity (what can be described as Nikkei consciousness or ethnic identity).

This study especially demonstrates that the ethnicity of second generations has been maintained and strengthened at an individual and collective level, with emphasis on the influence within their own families and their common historical perspective as revealed in their narratives. In the study of ethnicity among Japanese Indonesians, three factors are especially significant: blood ties, a sense of being the descendants of residual Japanese soldiers, and the Japanese influence from the Issei within the family.

研究分野：文化人類学、民族誌

キーワード：日系インドネシア人 エスニシティ 残留日本兵 歴史認識 インドネシア独立戦争

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 日系インドネシア人一世

日系インドネシア人一世はスマトラ島北スマトラ州でどのように生きたのかを調査した。日系一世の職業、現地人女性との結婚、日本人会の結成とその活動、家庭内での使用言語と食についてである。

北スマトラ州の州都メダンが日系インドネシア人の集住地域となっていく過程を、日系一世のスマトラ島上陸から日本の敗戦、インドネシア独立戦争時、そして同国独立後にかけての移動を辿ることによって解明した。

日系インドネシア人一世は、北スマトラ州だけでなくアチェ州においても多民族的状況下の社会生活で非日系インドネシア人からオラン・ジュパン(日本人)やトコ・ジュパン(日本の店)やルマ・ジュパン(日本人の家)などと範疇化され、認知されていたことを把握した。

### (2) 日系インドネシア人二世・三世

日系インドネシア人二世と三世の日本名に焦点をあて、日本名所持および日本名使用が彼ら彼女らにとってどのような意味を持っているのかについて考察した。日系人が日本名を所有していることと、社会生活で日本名を使用することでは、意味合いが異なってくるが、日本名は日系人にとって象徴的な役割を果たしていると言える。

渡日就労が北スマトラ州の日系インドネシア人に及ぼした影響は多くあるが、ここでは 2 つだけ示しておく。1990 年以降、日系二世・三世の渡日就労希望者は、日系人組織である福祉友の会メダン支部を訪れるようになった。すると、以前は日系一世同士の憩いの場であった同支部が、日系二・三世同士の出会いや憩いの場へと変化した。また、一時的ではあるものの、同支部の運営や活動に関与する日系二・三世が増加した。

このように、北スマトラ州メダンにおける日系インドネシア人の日系人意識やエスニシティの研究、民族誌的フィールドワーク、ならびに文献研究は以前から実施しており、日系人として抱く共通の歴史認識、日系一世の時代から今日にいたる日系人同士の交友関係、日系人組織である福祉友の会メダン支部とのかかわり方などに関する情報・データを収集してきた。日系インドネシア人のエスニシティをより深く考察し、体系的かつより実証的な研究を実現するためには、本研究が目指すような、とりわけエスニシティの世代ごとの特徴をあぶり出したり、世代ごとの変遷を辿ったりすることが必要だと考えた。

### (3) 研究資料

本研究に関連する書籍・刊行物は多く入手していただけて、これまでの民族誌的フィールドワークで下記のような研究資料・非刊行物を収集済みであった。

たとえば、厚生省(1958)『スマトラ地区未帰還者等名簿(附 残留邦人連名簿)』、福祉友の会メダン支部(作成年不明)『メダン英雄墓地に埋葬された日系一世の一覧表(Daftar Nama Issei Yang Telah Meninggal Dunia di Taman Makam Pahlawan Luar Kota Medan)』、福祉友の会(1982/5-1998/12)『月報』第1号-第200号などが挙げられる。

さらには、日系インドネシア人二世および三世からは、日系一世の写真などを提供してもらっていたことに加えて、日系一世が健在であった頃の思い出話などを聞きとっていた。これら貴重な史料から、日系インドネシア人一世の軍人時代の所属部隊、次世代への想い、日系一世同士のつながり、異国での生活の様子といった幅広い情報を得られた。他方で、福祉友の会メダン支部の関係者より日系人の家族構成表や同支部の諸活動の報告書などを提供してもらっており、これらの資料は日系二世・三世の現状を把握するのに有用であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、残留日本兵をルーツとする日系インドネシア人とはどのような人々であるのかをエスニシティという概念を用い、日系一世から日系三世までの世代別変遷に焦点をあてて解明する。

日系インドネシア人一世、そのほとんどの残留日本兵は、スマトラ島の他に、ジャワ島、バリ島などで確認されているが、その圧倒的多数はジャワ島およびスマトラ島に集中していた。現在スマトラ島における日系人は北スマトラ州メダンを中心に、日系二世から五世まで推計 2,800 ~ 3,200 人が集住しているのに対し、ジャワ島においては日系人の集住地域が見当たらず同島全域に散らばっている。このように、本研究の主要なフィールドとなるメダンには日系人が集住しているため、個人的観点からだけではなく集団的観点からの検討が可能である。つまり、日系インドネシア人という一集団の重層的なエスニシティを考察できる。

日系インドネシア人のエスニシティがインドネシアのジャワ島でもバリ島でもなく、スマトラ島北スマトラ州という文化的・社会的文脈においてどのように形成されたのか検討し、日系インドネシア人の日系人意識のもっとも根幹的な部分を明らかにしようと試みる。また、日系一世から三世までのエスニシティの変遷を辿ることによって、日系インドネシア人の体系的な研究を目指す。

### 3. 研究の方法

#### (1) フィールドワーク

研究には民族誌的フィールドワークを採用している。それはインタビュー調査、参与観察、資料収集の3つからなるが、本研究において主要な調査方法はインタビュー調査である。インタビュー調査は1対1または1対2の面接形式で、主にインドネシア語を用いて行う。インドネシア語を完全に理解できるわけではないため、より深い理解のために通訳に同行してもらう。質問項目を用いるインタビュー調査ではあるものの、質の高い情報を得るために、機械的ではなく雑談を交えたカジュアルな雰囲気でのインタビュー調査を目指す。

インドネシアでは北スマトラ州メダンとその周辺、日本では主に東海地方に居住する日系インドネシア人を研究対象地域および研究対象者とする。1990年入出入国管理および難民認定法の施行以降、日系インドネシア人二世・三世も南米出身の日系人と同様に、主に就労目的で来日している。渡日就労の影響や日系人の実際の日本との関わり合いなどを明らかにするために、インドネシアだけでなく日本もフィールドとし、日本とインドネシアの複数の場所でフィールドワークを行う。つまり、多現場エスノグラフィーのアプローチを採る。

#### (2) エスニシティの捉え方

綾部恒雄は、エスニシティを「国民国家の枠組みの中で、相互行為的状况下にて、出自と文化的アイデンティティを共有している人々による集団およびその意識」(1993:258)と定義しており、また「エスニック・グループが表出する性格の総体」と簡潔に言い表している(1993:13)。他方、竹沢泰子はシアトルにおける日系アメリカ人の民族誌において「エスニシティは多分にエスニック集団あるいはその一部の構成員がそのエスニック背景に基づき意識的・無意識的に表す心理的・社会的現象」(2017:13)であるとしている。本研究では、これらのエスニシティ定義に準じて、マルチエスニックな社会に生きた、または生きる日系インドネシア人の日系人意識や日系アイデンティティの集合体が彼らのエスニシティであるという視角から議論を進めていくことにする。

C・ギアーツは、エスニック集団の成員は系譜、宗教、言語などの「所与」のもものとされるものの愛着心を抱くのであり、そのような合理的感情に基づいて社会的紐帯が維持されていると考える(竹沢泰子 2009:133)。これはエスニシティを永続的・固定的なものとして捉える視点であり、実体的な系譜・言語・宗教などといった文化的特性による結び付きがエスニック集団の基盤と見なそうとしている(津田浩司 2011:19-20)。世代を経た現在でも日系インドネシア人を結びつけているのは、日本人の血を受け継いでいることや共通の歴史認識であると考えられるため、本研究ではこの本源主義的アプローチを採用する。

他方で、F・バルトの提唱したエスニック境界論がある。これは、エスニック集団は他者のアイデンティティと対比することによって自らのアイデンティティを定義するというように相互作用を重視する。そして他者との相互交渉を通して「我々」と「彼ら」を二分する基準および境界が生じることにより常に現象化するものであるという視点である。このエスニック境界論を採用する理由は、日系インドネシア人のエスニシティは他のエスニック集団との相互作用が働いて生成され、維持されていると考えられるからである。

### 4. 研究成果

#### (1) 令和3年度

令和3年度は「日系インドネシア人一世の生活世界、日系一世が異国の地でどのように生きたのかを解明する」という目標を掲げていた。具体的には、日系一世の結婚、宗教実践、仕事、家庭内での様子、日本の家族・親族との結びつきなどを調査研究する予定であった。以前から北スマトラ州に生きた日系一世の結婚、仕事、家庭内での様子などについては、民族誌的フィールドワークによって情報・データを収集してきたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、現地に赴いてフィールドワークを実施できなかったことから、新たに文献を探し文献研究を行った。以下に、その研究成果をいくつか示す。

1940年代前半から1950年代前半のスマトラ島において日本人や残留日本兵が現地の人々とどのようにかかわっていたのかが明らかになった。その結果、当時のインドネシアの人々が日系一世や日本をどう捉えていたのか推考することが可能となった。周りのインドネシア人からどう思われていたか、インドネシア人とどのような交流をしていたかを把握することは日系一世のエスニシティを考察する上で重要な作業である。

スマトラ島のどの地域に日本軍の司令部や野戦病院があり、どの農園で自活していたのか、日本軍人や残留日本兵がどこで何をしていたのか、また日本軍政、日本敗戦、インドネシア独立宣

言、そして連合軍の進駐のどの時期、どの場所に比較的多く日本人が集まっていたのか、などスマトラ島内での日本人および残留日本兵の移動経路に係る断片的な情報を多くの文献から集めた。

## (2) 令和4年度

令和3年度は新型コロナウイルス感染症の影響でインドネシアへ渡航できなかったが、令和4年度は2月から3月にかけて約2週間、北スマトラ州のメダンとプマタン・シアンタルで民族誌的フィールドワークを実施することができた。その間に、日系インドネシア人二世を主な研究対象として実施したインタビュー調査からは、多くの情報と知識が得られた。その中からいくつかを以下に列挙する。

日系インドネシア人二世は、生粋の日本人である父親・日系一世の生き方や生き様を目の前で見て、そうした父親に育てられたために、自然と日系インドネシア人となった。たとえばインドネシアで生まれ育ち、日本語が話せず、日本名を持たず、一度も来日したことのない日系二世がいたとしても彼や彼女は日系インドネシア人なのであり、日系人意識を強く抱いている。

渡日就労の経験があり10年、長いと20年前後日本で暮らしたことがある日系インドネシア人二世の多くは、日本人および日本社会のことを概して肯定的に捉えている。

日系インドネシア人二世の多くは多かれ少なかれ社会生活の中で、日本人の子どもであるが故にからかいの経験を持っている。それでもなお日系人であることに誇りを持っている。

以上の事柄に日系インドネシア人に共通する、ないしは各人の歴史的・社会的・文化的背景といった文脈を踏まえて考察を加えた。さらに、令和4年度に実施した日系二世らとのインタビュー調査と文献調査によって、日系一世らのスマトラ島内での移動経路やインドネシア人女性との結婚までの経緯や家族に戦時体験をあまり語らなかった理由などについての新たな事例や情報が付け加えられ、日系一世についての理解がさらに深まった。

## (3) 令和5年度

最終年度となる令和5年度は、8月から9月にかけて約3週間、日系インドネシア人の集住地域である北スマトラ州メダンおよびその周辺とジャカルタでフィールドワークを実施した。メダンおよびその周辺に居住する日系インドネシア人二世とのインタビュー調査にもっとも多く時間を費やした。日系インドネシア人二世の語りを基にして、彼ら彼女らのエスニシティがどのように強化されてきたのかを考えることができた。また、日系人組織である福祉友の会ジャカルタ本部とメダン支部、日系一世らが眠るカリバタ国立中央英雄墓地などを訪問した。日系人をインドネシアの歴史の文脈に位置づけて理解するのに役立った。

日系インドネシア人二世が家庭内で受けた日系一世＝父親からの影響は、日本的慣習や日本食や日本語というように特定の文化要素に限定されない。そして日系二世が自らを日系人であると同定するのには、日系一世の生き方（仕事に対する考え方・しつけ・愛情表現など）に大きく影響されていることがわかった。

他方で、父親・一世が日本を捨て自分たちのために尽くしてくれたその生き様を目の当たりにしたり、とくに小学校時代に「日本人の子ども」であるという理由で、一過性のからかいを経験したりと個人・集団単位で二世のエスニシティは強化され維持されてきたと考えられる。小学校時代の一時的な冷やかかしは日系人個々人の経験であるだけではなく、日系インドネシア人全体の記憶として残り続けていくだろう。また、それは苦い経験であった反面、残留日本兵を先祖に持つ日系人であるが故に、「日系インドネシア人と非日系インドネシア人」や「我々と彼ら」というように他者から区別されたことで、二世の「残留日本兵の子ども」であるという意識が芽生えた、または意識が高まったと捉えることもできよう。

## (4) 日系インドネシア人二世

日系インドネシア人二世であることは「残留日本兵の子ども」であることが前提にある。日系人を規定するのに血縁も重要であるが、日系人の中には台湾出身者も含まれる。「父親が軍人である日系人と父親が一般人である日系人がいますよね。両者には戦争体験があるかないかの違いがあります」とある日系二世が述べるように、二世はたとえば来日し職場で出会う、沖縄の漁民を先祖とする日系インドネシア人（日系ミナハサ族）に対して、同国人でありかつ日系人であるために他のインドネシア人に対してよりは親しみを抱くものの、「残留日本兵の子ども」である我々とそうではない彼ら彼女らをわけて認識する。加えて、ブラジルやペルーなど他国出身の日系人にもある種の仲間意識を持つが、彼ら彼女もまた「残留日本兵の子ども」ではない。この

ように、日系インドネシア人二世のエスニシティの基底にあるのが「残留日本兵の子ども」であるという共通の歴史および歴史認識であると言える。

それでは、日系二世のエスニシティがどのように形成され、強化されてきたのだろうか。日系一世のインドネシア独立戦争時の行動や体験が二世の間で共有されてきた。同戦争時に父親・日系一世が敵味方なく治療に当たったことや命懸けで戦闘に加わったことは二世の誇りであり、二世のエスニシティの形成と維持に大いに影響していると言えよう。二世 A の父親はインドネシア側に立ち武器の制作や修理に取り組み、B の父親は負傷者の治療に当たり、C の父親は残留日本兵の実態を把握するために、危険を顧みずにスマトラ島内を奔走した。これらは二世各人の父親・一世の話ではあるものの、二世 A から B へ、そして B から C というように人伝で広まり、また日系人が参集した際に二世 D から E、F、G、H に語られ、日系人たちの間で彼ら彼女の史実が共有され、構築されてきた。

また、父親・一世が日本を捨て自分たちのために尽くしてくれたその生き様を目の当たりにしたり、日系インドネシア人のスティグマとまでは言えないものの、とくに小学校時代の一過性のからかいを経験したりと個人・集団単位で二世のエスニシティは強化され維持されてきたのである。

日系二世らの語りに耳を傾け、時間を共有することで、彼ら彼女らの日系人としてのエスニシティを考える際には、日系一世が残留後にインドネシア独立のためにどう行動し、同国独立後に異国の地で家族のためにどう生きたかという事柄が非常に重要であることを認識するにいった。その前提には、父親が日本を捨てインドネシアに残留してくれたことと、それに対する感謝と哀れみの念があると考えられる。このこともまた前述のインドネシア独立戦争中の一世らの勇敢さや果敢さなどと同じように、日系人の中で共有され、語り継がれている。

他方、ドクトル・ジュパンとしての日系一世の功績は北スマトラ州の日系人の中でよく知られている事柄であるものの、この文脈においては、冒頭で紹介した竹沢泰子の提唱した「エスニシティは多分にエスニック集団あるいはその一部の構成員がそのエスニック背景に基づき意識的・無意識的に表す心理的・社会的現象」に当てはめて考えることができよう。ドクトル・ジュパンを生業としていた父を持つ日系人と限定的ではあるが、彼ら彼女らは過去に一世が仲間や地域住民を援助したことに誇りを抱いているのである。この事実と誇りが一部の日系インドネシア人二世のエスニシティの一部分を構成していると言えよう。

「本研究の目的は、残留日本兵を先祖とする日系インドネシア人とはどのような人々であるのかをエスニシティ概念を用い、日系一世から日系三世までの世代別変遷に焦点をあてて解明することにある」のだが、日系三世に関する情報・データをあまり収集することができなかったため、三世代にわたる彼ら彼女らのエスニシティを明示するまでにはいたらなかった。

どのエスニック集団のエスニシティも重層的であり状況的でもあるため、より多面的にかつ個人・集団単位の調査研究を展開していく必要がある。今後も日系インドネシア人の体系的な研究を目指し、日系一世の時代から今日に至るまでの日系人同士の交友関係、日系人組織である福祉友の会メダン支部とのかかわり方、日本での就労と日本滞在の影響といった側面も併せてエスニシティを解明していきたい。

#### <引用文献>

綾部恒雄、現代世界とエスニシティ、弘文堂、1993、258

同上、上掲書、13

竹沢泰子、日系アメリカ人のエスニシティ 強制収容と補償運動による変遷 新装版、東京大学出版会、2017 年

同上、人種とエスニシティ、文化人類学辞典、丸善、2009、133

津田浩司、「華人性」の民族誌 体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから、世界思想社、2011、19-20

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤雅俊	4. 巻 30
2. 論文標題 北スマトラ州における日系インドネシア人二世のエスニシティに関する一考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 比較生活文化研究	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masatoshi ITO	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 Ethnicity of Second-generation Japanese Indonesians in North Sumatra	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Linguistik Terjemahan Sastra	6. 最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤雅俊	4. 巻 187
2. 論文標題 軍靴からサンダルへ 日系インドネシア人一世の生涯	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 78-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 伊藤雅俊	
2. 発表標題 日系インドネシア人二世のエスニシティに関する一考察	
3. 学会等名 第39回日本比較生活文化学会全国大会	
4. 発表年 2023年	

1．発表者名 Masatoshi ITO
2．発表標題 Second Generation Japanese Indonesians Ethnicity :The Formation Process of Nikkei Consciousness
3．学会等名 The First International Seminar on Language, Literature, Education, Arts, and Culture in conjunction with 5th International Seminar on Language, Culture and History (国際学会)
4．発表年 2023年

1．発表者名 伊藤雅俊
2．発表標題 Generasi Pertama Jepang yang menjadi Orang Jepang di Sumatera Utara
3．学会等名 メダン州立大学大学院社会人類学研究科 公開講座（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 伊藤雅俊
2．発表標題 Second Generation Japanese Indonesians Ethnicity -A Case Study of North Sumatra-
3．学会等名 4th International Conference on Social Sciences and Interdisciplinary Studies. State University of Medan, Online Conference（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 伊藤雅俊	4．発行年 2022年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 316
3．書名 日系インドネシア人のエスノグラフィ 紡がれる日系人意識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------